The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 泉大津織物業の歩み : 大野歳雄氏に聞く(2・完) |
| Author(s) | 阿部, 武司 |
| Citation | 大阪大学経済学. 2005, 55(3), p. 83-101 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/14878 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

# 泉大津織物業の歩み

## ー大野歳雄氏に聞くー（２・完）

阿　部　武　司

第２回聞取り：2004（平成16）年10月13日
於，泉大津市立織編館会議室

### 泉大津の紡績企業

**阿部**　前回のお話を続けさせていただきます。表にはこれまでのお話に登場した泉大津の比較的大規模な紡織企業の昭和32（1957）年の状況が示されています。

**大野**　吉野では先代の松次郎さんが深喜毛織の工場長でして，深喜から支援を受けて吉野紡績を創立しました。２代目の一郎さんは小学校では私の１級上でしたから，大正９（1920）年生まれだと思います。深喜さんが深喜毛織で紡績工場を設立するために，松次郎さんを呼んできました。この人は，愛知県三河蒲郡の人だと思います。岩月紡績も蒲郡の辺の紡績で，大津は紡毛紡績ですが，蒲郡では綿糸紡績でして，繊維の粗い糸を引いていました。

**阿部**　三河といいますとガラ紡，水車紡績でしょうか？

**大野**　そうです。そこから大津に３，４人来ています。吉野紡績社長，岩月紡績社長と，来た人はみんな独立しています。

**阿部**　表には必ずしも全部の業者が出ておりません。規模が比較的大きいところだけを拾いましたので，岩月さんも載っておりません。

**大野**　純粋の大津の企業は深喜，興津，吉野ですね。吉野さんは深喜毛織の出身ですね。松内さんは昔から大津の土地の人で，納谷竹さん，大津毛織さん，藤井さんもそうです。東亜紡は支社です。東亜紡織泉州工場と書いてあるでしょう。本社は大阪市です。

### 終戦直後の状況

**阿部**　前回うかがいましたのは主に戦前のお話で，きょうは戦後のお話を中心にさせていただきます。この前のお話で，軍隊に行かれたということですが，お帰りになったのは昭和何年でしたか？

**大野**　私は内地にいましたので，昭和20年９月１日です。それまでは茨城県の鹿島神宮におりました。神宮の中に馬を連れていて，森をお借りし馬が飛行機に見えないようにしていました。村でお世話になっていたのです。

**阿部**　お帰りになったのは終戦後すぐですね。

**大野**　すぐです。「帰ろうか」というような調子でね，終戦になって中隊長も大隊長も解散も何もなしに，「きょう大阪仕立ての汽車をこしらえるから，大阪へ帰る者は皆帰れ」というようなことで，連隊は全部そろって帰ってきたのです。アメリカ軍に兵器を渡す者だけに兵器が渡されましたが，そのために残った人数は知れたものでした。「アメリカにそのような兵器を渡すのにばからしくて残っていられるか」ということで，一日も早く家へ帰りたい気持ちが

表　泉大津の主な紡織工場（昭和32年末）

| 名　　称 | 代表者 | 所在地 | 資本金（万円） | 従業者(人) | 製　　品 |
|---|---|---|---|---|---|
| 中島毛糸紡績㈱泉大津工場 | 中島小一郎 | 板原370 | 1,500 | 500－999 | 純梳毛糸，純紡毛糸，純紡毛毛織物 |
| 大津毛織㈱ | 臼谷喜代松 | 旭町116 | 5,000 | 300－499 | 純紡毛織物，毛毛布，純紡毛糸 |
| 深喜毛織㈱ | 深井喜逸 | 春日町34 | 3,000 | 300－499 | 純紡毛織物，毛横編メリヤス，セーター（婦人物），純紡紡毛糸 |
| 東亜紡織㈱泉州工場 | 西宗康夫 | 虫取90 | 130,000 | 300－499 | 毛毛布，純毛紡毛糸，スフ毛布 |
| 興津紡績㈱ | 中川定 | 宇田60 | 800 | 300－499 | 純紡毛織物，毛毛布，純ソ毛糸 |
| 藤井毛織㈱若宮工場 | 藤井恒一 | 若宮町60 | 10,000 | 100－199 | スフ毛布，毛毛布，純紡毛織物 |
| 大津毛織㈱紡績工場 | 臼谷喜代松 | 春日町53 | 5,000 | 50－99 | 純紡毛糸 |
| 納谷竹毛織㈱ | 納谷竹松 | 旭町194 | 750 | 50－99 | 純紡毛織物 |
| 松内毛織㈱ | 松内直 | 東港町91 | 1,000 | 30－49 | 毛毛布，混紡毛布，スフ毛布 |
| 吉野毛糸紡績㈱ | 吉野一郎 | 池浦503 | 300 | 20－29 | 混紡紡毛糸，純紡毛糸 |

（注）㈱は株式会社の略号。
（出所）大阪府商工部編『大阪府工場名鑑　昭和33年版』（昭和33年）

あったので，軍から「だれそれとだれそれは残れ」という命令も出たのですが，私らは命令が出ようが出まいが，兵器をアメリカに渡したくありませんでした。ときには良い双眼鏡も持っていたのですが，それもガラスを金槌で割ってしまいまして，自分たちが使っているものは１つでも渡したくはない気分でした。

**阿部**　お帰りになると，日本全体で繊維が足りないという状態でしたね。繊維製品に対する需要は大変あったものの，生産活動がなかなかできなかったとよく聞きますが，そうした記憶はおありですか？

**大野**　戦時中以来帰ってきたときには織機はどこでも統制になっていました。それで，同業者がばらばらでは仕事ができないので，織機の何々組合というような組合をこしらえて１つの工場へ勤めに出ました。帰ってきたら私のところも織機がなくなっておりました。そんなわけで組合が２つか３つありまして，そこで織物のあとを皆つないでいきました。

私らは，あの時分には手編みの残糸が大津にたくさん残っておりましたので，その糸を２本撚って綛にして全国に売り歩き，北海道の端まで行きました。私が行った東の端は八戸，青森です。それを担いで「毛糸要らんけ，毛糸要らんけ」と言って１軒ずつ売りました。実は毛糸ではなくて，ほぼ全部毛布の緯糸で，それを色ものに撚り合わせて綛にし，１ポンドなら１ポンドにして，大津の人は全国いたるところを歩きました。弟などは北海道の一番先，稚内まで行きました。

私は青森・八戸ではときには旅館に泊まって，家から品物を送らせました。よくもうけまして，小遣いには不自由しませんでした。何を作っても売れました。今もある編み糸とは違いまして，私らが糸を合わせてこしらえた手編み

のものです。八戸辺りでは船員が，編み物が上手らしいのです。退屈紛れに編むのですね。それで，八戸辺りで私は１週間ほど泊まって，大津から品物を送らせました。

**阿部**　船乗りが仕事がないときに編み物をするのでしょうか？

**大野**　船に乗っていても，航海の途中で編むのだそうです。海軍の兵隊もやっていたように聞いていますが，ともかくよく売れました。旅館が買ってくれました。旅館が私らの持っていった糸を，買いに来た人に売っていました。２，３件の雑貨屋に卸した記憶もあります。

**阿部**　船乗りは手編みで何を作っていたのでしょうか？

**大野**　自分用のセーターなどです。それぐらいしか衣料は自由にできなかったのですね。私の母も，服地も使えましたが，小学校へ行っている私ども子供のセーターを手編み糸で編んでくれました。

一番良かったのは木綿です。これは「闇」で取引されており，私も一晩泉大津の警察にとめられましたけれども，木綿と綿糸がよく売れました。大津はご存じのように漁業と織物が産業の中心でしたので，食べ物には不自由したのです。私は終戦のころ鹿島神宮におりましたので，あの辺には詳しかった。北浦や，航空隊のある霞ヶ浦という湖がありますが，あのあたりの海岸線の警備のために大阪師団が全部九十九里浜の防衛に出ました。終戦を迎えたのが今の勝浦辺でしたので，顔を知った人がおりましたから，そこへ編み物の糸を送ったり，綿糸を送ったりしました。金をもらったことよりも米を持って帰ったことのほうが記憶に残っています。警官の目を忍んでです。この時分は統制がきつく，駅へ行っても米１升ぐらいでしたら手持ちが許される程度でした。

その当時，「ようそんなに電車賃が続いたな」という言葉がよく出たのですけれども，実は軍隊から帰りしなに復員の乗車券をくれたのです。その乗車券を１年間ほど使いました。大津の駅でしたら顔パスで通れました。復員したばかりのあの時分，服装は軍服でして私服というものはなかったので，それで大方半年以上，茨城県の鹿島や潮来へ通いました。家族も多かった関係で，長男の私だけではなく父や妹も連れたりして，米を１升でも２升でも余計持ち帰れるようにしました。

**阿部**　米はどのぐらいまで持ち帰ることができましたか？

**大野**　最高では１斗持って帰ってきました。私だけではなく，この辺の人は全部がそうでしたね。お互いに情報交換をして，「あんたとこ，きのう米買ってきて，駅で会うたけどやな，どこ行ってきましたんや？」というようなものです。そうした話を聞いて，「それやったら，うちもどこそこ行ってこようか」と決めました。私は行き先の茨城には，「次またいつの日に来るから用意しといてや」と言っていました。茨城辺りでは米が余っていましたので，いつ行っても手ぶらで帰ることはありませんでした。向こうも「金は要らん。毛布持ってきてくれ」とか「一番木綿持ってこい」と言って，それらを米と交換してくれました。

**阿部**　木綿というのは綿布ですか？　白木綿，金巾（かなきん）のたぐいでしょうか？

**大野**　白木綿生地が一番好まれて，持っていきやすかった。

**阿部**　今のお話は昭和20年から21年にかけてのことでしょうか？

**大野**　昭和20年９月に帰ってきてから約２年通いました。

**阿部**　そこで取引されていた糸や木綿は統制外でしたか？

**大野**　糸などは統制品ではなく，木綿は統制品でした。それに関して一度警察へほうり込まれました。

**阿部**　いわゆる「闇製品」ですか？

**大野**　俗にいう「闇」時代ですね。泉大津はそ

の点物資が豊富でしたからね。M毛織さんが，海軍から原糸を預かって織り上げた毛布が終戦になったので，それを全部もらい受けた。返す相手がない。軍隊がつぶれて海軍省もなくなったので，Mさんのところに積んである原糸を，Mさんは賃織りに出していたという噂がありました。

**阿部**　織物業が復活したとも言えるのでしょうが，海軍等の在庫あるいは戦時中の製品や半製品などが売られていたというお話で，それを２年間お続けになったのですね。

**大野**　２，３年続けました。その当時，稼動している工場の製品を「闇」で流したので，品物の供給は続きました。

**阿部**　その２，３年間，大野さんの工場では織物製造にはまだ戻っていなかったのでしょうか？

**大野**　家庭工業ですから，まだそこまではいっておりませんでした。深喜さんや藤井さんあたりは戦前，戦後とずっと織っていました。

**阿部**　深喜さんや藤井さんのような大手は，終戦後すぐに生産を始められたのですね。

**大野**　大手では戦時中，軍関係の生産のため工場が１日でも止まることはなかったのですが，いわばそのまま原型を残していたわけです。終戦後も休業をせずに工場が動いておりました。

**阿部**　家庭工業はまだもとに戻れなかったのですか？

**大野**　はい，松内さんあたりでも機械はそのまま残していました。松内さんでは分家は松直，母屋は清さんと言いまして，私らも「直ちゃんとこ，清さんとこ」と呼ばせてもらっていました。

**阿部**　比較的小さい工場はどういう状態でしたか？

**大野**　織機５台から８台というところは全部企業整備にかかって織屋をやめておりました。私のところもそうでしたが，深喜へ昭和25年に行って，30年ぐらいから再開に動きかけたのでしたかな。父が，子供を兵隊にやったし，工場を動かしながら食糧を確保するのは，食糧事情のために戦争中は難しかったんですね。それで，「織り屋やめるで」と私に声をかけてくれました。私は信太山野砲連隊におりましたが，「おやじさんじゃ無理や」と思いました。今考えたら40歳代の若いおやじだったのですけれども。子供が５人いたので，食糧調達に苦労していました。

## 生産の再開

**阿部**　大野さんのところは昭和30年ごろ復興されたということですが，そのほかの割合規模の小さい織屋さんも大体そのころ生産を再開されたのでしょうか？

**大野**　息を吹き返したのは朝鮮戦争です。これで泉大津が一遍に生き返りました。

**阿部**　昭和25年に朝鮮戦争が勃発する直前の24年にドッジ・ラインによる不況がありましたが，それについてご記憶はありませんか？

**大野**　若かったからか，記憶はありません。昭和24年ぐらいまでは手編み毛糸を売りに歩いて，定期を買って毎晩難波へ遊びに行きました。よそからもそれを買いに来てくれました。天井の上に残っていた，あるいは倉庫の隅に残っていた糸を二重に色合わせした物を皆が買いに来てくれたので，小遣いに不自由することもなしに，メトロからキングからキャバレーで知らない所はなかったですね。

　私らの相棒は兵隊で帰ってきたから，気も荒かったし，「闇」でおもしろいほどお金が入ってくるし，その日使い切っても明くる日，友達４，５人がよれば，「大野，金あるのんか？きょうないのや」，「おれ持ってるから行こうか」というようなものです。同業者が多かったので，４，５人の友達に小遣いが入ってきたわけです。

**阿部**　朝鮮戦争は昭和25年から28年まで続きま

したが，特に昭和25年は大変景気がよかったと言われています。そのころ生産活動を再開された方も多かったのでしょうか？

**大野**　多かったですね。私も25年には朝鮮戦争で忙しいので，深喜さんへ手伝いに行って出荷や織上げに忙しかった。工場の中は民需品ではなしに国防色一色でした。朝鮮戦争が大津の町を興したというのが私の記憶です。

**阿部**　朝鮮戦争自体は28年まで続きましたが，繊維だけは割合早く過剰生産になって26年ぐらいから景気がよくなくなったと聞いておりますが。

**大野**　そうですね。「織れ，織れ」で何でも織っていたらいいし，国防色で無地ですから，すぐに過剰になっても不思議ではありません。出荷に追われたかわりに，朝鮮戦争が終わったら皆ダウンですね。私は深喜の出身で，社長と兄弟みたいな仲でした。「ちょっとうちへ手伝いに来いや」といわれて，よその仕事だけれどもおもしろがって手伝っていました。朝鮮戦争が終わったので，ぼちぼち深喜さんもラシャを手がけました。ラシャといっても，泉大津では厚手オーバー地です。皆さんが着ておられるラシャは服地。愛知県の一宮から名古屋，春日井，津島，あの辺が細物（細い純毛糸すなわち梳毛（そもう）から作られる製品），背広地の産地です。泉州はオーバー地です。愛知県は紡績が梳毛でしたが，泉大津には梳毛の紡績がなかったのです。深喜さんでも中島さんでも全部太い純毛糸でした。

**阿部**　先ほどの昭和32年に関する表では，朝鮮戦争後に多くの企業が毛糸を生産していますね。

**大野**　手がけてきてはいますが，紡毛糸に近いのです。毛といえば皆さんが着ているのが梳毛ですが，泉大津でそれを引くだけの能力がある紡績はなかったのです。大津で使われていた梳毛は多分買糸です。

大津毛織さんが一番最初に梳毛を作ってセーターや婦人ものに変わっていきましたが，そこだけでしたね。メリヤス生産は韓国人の仕事でした。韓国人が泉大津や大阪あたりでセーター手編機でセーターを織っていました。しかし，大津毛織さんはセーターを含めてあらゆるものを手がけました。

## 整理業の展開

**阿部**　大津毛織のような大手企業の製品は，朝鮮戦争後には綿ではなくて毛になっていたとみてよいでしょうか？

**大野**　戦前は綿毛布主体で，毛の系統は少なかった。私らは名古屋と言わずに尾州と言いますが，尾州の主体が一宮です。純毛系統のものは一宮に全部仕上げに出したのです。梳毛で織ったものなどが，大津から原反で出て，製品になって帰ってきます。服地20メーター，ラシャでしたらほぼ50メーターというような反巻きで大津へ帰ってくるわけです。純毛の服地の仕上工場はなかった。それは毛布の起毛工場とはまた別でした。

それを見て，今度は皆が製品へ手を出した。深喜さんでも原反を名古屋へ送るのですが，向こうも自分の所の工場を持っているから，深喜さんにすればいくら急いだ品物でも，先方では自分のところの製品を優先します。それで私は，深喜から約７，８年，自分のところの品物の加工を急がすために名古屋へ出張しました。「自分とこでやらないかん」ということから，深喜と藤井さんが整理工場を持ったのですが，それが今でも続いています。

藤井さんの若宮工場は織りとは違います。若宮工場の場合は起毛整理です。織物は福泉で織って，それを若宮工場で仕上げたのでした。深喜だけが原糸から製品まで一本化していました。羊毛原料はオーストラリア産の買付けでして，深喜と大津毛織さんが競りました。藤井さんの羊毛の買付け高が世界一という噂が流れた

ことがあります。深喜はカシミヤに力を入れました。

**阿部**　オーストラリアの原毛を深喜さんと藤井さんが買われたということですか？

**大野**　松内さん等は普通，小さい原料屋から仕入れていました。松内さんもほかの織屋も紡績はやっていなかったので，原糸の買付けは全部大津でしたわけです。

**阿部**　深喜さんや藤井さんはオーストラリアの原毛を商社経由で輸入していたのでしょうか？

**大野**　ほぼ商社経由ですね。ただ社員をオーストラリアへ出張させていた。

**阿部**　直接買われたこともあったのでしょうか？

**大野**　向こうへ行ったこともあります。「どこ行くんや？」と言ったら「オーストラリア」と言っていました。深喜さんは地味あるいは堅実ですが，藤井さんは派手なのです。２人とも同年，同級生で堺商業学校出身でした。大津で成功した人で大学出は１人もいません。「大学行くんやったら工場に入れ」というのが大津の言葉です。実践的ですね。

**阿部**　朝鮮戦争がきっかけになって比較的小さな工場でも生産活動を再開した場合が多く，大手企業はその機会に毛織物に移って，それを本格的にやるようになった。そして戦前から深喜さんなどでは，整理は名古屋に依存していた。こういうお話ですね。

## 深喜毛織

**大野**　戦前，深喜は，綿毛布が中心であったときには名古屋とは関係がなかった。オーバー地を織るようになってから名古屋との関係ができたのです。梳毛が出てからです。

**阿部**　後に，深喜さんや藤井さんは自分のところで整理・起毛をやるようになったということですね。

**大野**　そうです。自分のところの製品を全部出すと，柄とか風合いとかを名古屋に取られるのです。私でも大津駅で下車せずに泉佐野まで乗り込んで人の着ている背広の組織を頭に入れていたものです。名古屋は怖いところで，反物を切ります。小さい手ばさみを持っていて，私らのどんな品物でも５センチ切って，それを１本ずつ「起こして寝さして，起こして寝さして，その次はグリーン，その次は水色」というふうに分解していくのです。名古屋の企業には組織課という部署があって，その５センチをもらうと，これをどのくらいに縮小すればどのくらいに上がるというところまで追求する仕事ばかりしていました。方眼紙に，打ち込みいくらというような指図書が織りのほうへ流れてくるのです。

深喜出身で紡績で成功した岩月さんと吉野さんの話はすでにしましたが，深喜さんは人使いが荒いんです。私は，岩月の社長に可愛がってもらっていた関係で，岩月さんに，「うちのおやじほど人使いの荒い人はないで」と言いますと，「ほやけど大野さんよ，深喜さんという人は偉いぞ」と言って次のような話をしてくれた。東京に，大津の有力者が寄って統制解除を申請しに商工省へ行った時だと思います。あの時分夜行列車に８時間も乗りましたが，汽車へ乗ると，深喜さんが途中でいなくなりました。「深喜のおやじさんはずるい。また二等車でゆったりと寝てらい」と皆で笑っていたところ，どなたかが二等車へ深喜さんを見に行きましたら，深喜さんは，やはり二等車に座っていましたが，私らでも始終携えておりました方眼紙を持っていました。戦後の日本には背広に関してはイタリー製とかイギリス製とか外来の見本がありませんでしたが，隣の席の人が，外来の背広を着ているのに気づいた深喜さんは，「東京行かれるのやったら，私も東京へ行くのでその間，おたくの背広をちょっとお借りできませんか？」と尋ねたところ，その人は，「私のこの背広はイギリス製です」と快く貸してく

れました。大使館，外務省あたりのメンバーでしたら皆着ていました，そうした背広を借りて，深喜さんは，東京に行くまでに１着か２着分，方眼紙に組織図をこしらえたといいます。岩月の社長がこの話をしてくれて，「喜逸さんここまで努力してんのやさかいね，歳雄さん，喜逸さんもお前を頼りにしてんのやから，皆も腹立ったかてなだめたりや」という言葉を聞いたとき，おやじさんらしいなと思いました。

**阿部**　今お話いただいた深喜さんのご研究はいつ頃のことでしょうか？

**大野**　統制解除を頼みに行く時分ですから昭和23年，24年位の話だと思います。深喜さんは出張から帰るとよく織物の組織図を持っていました。深喜の社員の私らでも，外へ出ていくメンバーは全員方眼紙を持っていました。自慢ではないけれども，こうしたことが深喜が現在でも生き残っている１つの理由です。

言葉は悪いのですが，「鬼の深喜」というのが深喜社長に対する悪口です。そのくらいきついのですが，従業員は30年，40年も勤めて，文句を言いながら，やめた者もありません。私は，従業員のOB会の会長ですが，どこかあの人に仁徳があったのでしょうか？　文句を言われながら人を引きつけるとでもいうのでしょうか？

**阿部**　朝鮮戦争が終わって昭和29年に繊維業界では大変景気が悪く，例えば大阪の繊維商社五綿八社のうちの八社の多くが倒産してしまいましたが，次の昭和30年になりますと高度経済成長が始まります。そのころについて何かご記憶はありませんか？

**大野**　私は深喜一本でしたので，景気，不景気を知りません。「よそさんはどうでもええ」ということでして，「自分とこのかまどだけ火消すな」というのが大津の皆の言葉です。私は民生委員を40年させてもらいましたが，おやじが始終言っていました，「人のことするんやったら，まず自分とこが世話にならんだけの家にして，それから人さんの世話せえ」というのが泉州人の口癖でした。

それで，泉州というところは福祉が遅れているのです。地車とお寺には大津の人は率先して寄附します。藤井さんでもだんじりに500万円，深喜さんは地車は嫌いだったけれども，お寺の建設には1,000万円を寄附するのですが，市役所の福祉に対しては，日赤が赤い羽根を頭下げて買ってもらいに来ても，出してくれて100円，1,000円でした。私は，民生委員をしたり大阪府民生委員連合会の三役をやったりした関係でよそのことには詳しいのです。泉大津だけではなくて泉州地方では福祉関係は概して遅れています。

深喜毛織さんは，100周年記念のときに初めて１億円を寄附しました。大津はオーストラリアのある市を姉妹都市に持っていましたが，その都市への交流に行きしなに深喜さんの１億円の利息で出張しました。織物業界でそれだけの金額の寄附をしたのは聞いたことがありません。

**阿部**　深喜さんには戦後はいつまでお勤めをされていたのか，あるいはかかわっておられたのでしょうか？

**大野**　昭和25，６年に自分の家をやりくりしながら，深喜毛織の外注もして，うちにいたり深喜さんの工場にいたりというようなことが，深喜の本社が今の板原へ変わって整理と織りとを統合する昭和45年まで続きましたが，それから足が遠のきました。この統合までに深喜は２万坪ほどの土地を買って，そこにまず整理工場を持っていって，織物工場をまたその次に持っていき，現在では５階建てにして紡績工場まで，つまり原料から商品になるまで一本化しています。

先日も深喜にいきましたら，今の社長の喜一さんが，「繊維では私らの所位しか残っていない。それで，婦人会とか団体が見学させてくれというてくると，どなたにも断らんと案内させ

てもろうてんのや。これも商売のうちですわ。泉大津では，まだ小さい織機も残ってますのや。紡績を見せて，織ってこのように仕上げて，あの糸でここまでの製品ができますということを皆さんに説明してますんや」と言っていました。

深喜では社長というよりも専務側近が皆偉いのです。社長は一つも苦労をしていないのですから。先代の社長が自分で糸巻をしたところを見たこともありますけれども，息子が大学を出た時分には深喜は一流の会社になっていましたからね。深喜といったら世間にはほぼ通りました。従業員が，「給料もろうてんのやから給料だけの仕事しやないかんのや」というのが深喜さんと私らの考えです。

私は，深喜では新人教育の責任者でしたが，入社の時に若い人達に，「あんたらにこれから深喜毛織が３年投資すんのや」とよく言ったものです。私はそこまで考えてはいなかったのですが，「どこの会社へ行っても３年ほどが投資である。３年たって，その経験が今度は会社へ返ってくる」という言葉を大阪辺りの企業でも今では言っています。大津でその言葉が出たのを私自身が聞いたのは深喜だけで，よそでそんな言葉を聞いたことはありません。しかし，私は社長にそう言われて，新人教育の時に，「これから深喜さんが３年あんたたちに投資すんや。何か１つの職業もしくは勉強してもらうんや。３年たって初めて今度はあんたらが深喜の繁栄，また事業に力貸すんや。それで初めてあんたらが月給もらう資格があんのや」と言っていたわけです。

## 大野工場

**阿部**　深喜さんと疎遠になられた反面，ご自宅の工場の経営に力を注がれるようになったわけですね。ご自宅の経営について何か重要なことはありませんか？

**大野**　そのあとも深喜さんからは結構受注させてもらいましたよ。深喜に仕事をもらいに行かずに，深喜の人が自分で仕事を持ってきてくれたことがよくありました。うちでは織機８台，深喜さんには60台が据わっていましたが，合計68台を見ているようなものでした。深喜では外注係と言っていた営業担当者が，「大野さん，２号機（うちの織機の番号です）の製品はあれで終わりやで。今度何々持っていこう？」と言って相談してくれます。「何でも構わん。気楽なやつ動かしてくれ」と言うのですが，傷をこしらえるのは怖かった。お昼御飯を食べに帰った時に織り前の製品を見て，晩には工場へ入ってという生活でした。弟が，出荷程度のことでしたが，ぼちぼち工場のほうを見てくれるようになりました。

**阿部**　お宅ではどういう製品をお作りになったのでしょうか？

**大野**　ほとんど全てがオーバーです。それから深喜のカシミヤのショールですが，カシミヤの糸は，高級品なので取られると言って，よそには出せませんでした。高島屋でも大丸でも，「これはうちで織ったショールです」と私自身がその製品を知っていますので，よく話しましたよ。

**阿部**　戦後，大野さんのお宅では綿毛布は作られていなかったのですか？

**大野**　綿毛布も織りましたが，深喜さんが忙しい時にはカシミヤのショールを作るのを手伝ったりさせてもらいました。それで，「大野さんの顔は深喜や」と言われるほど深喜の人間になっておりましたので，金はよう儲けなかったが，経済的に特に苦労した記憶はありません。

**阿部**　ほかの比較的規模の小さい織屋さんは，綿毛布を続けていたのですか？

**大野**　織っていました。ラシャを織っている所は少なかった。織機が違うのです。傷をこしらえたら高くつきました。毛布の場合は１，２枚傷ものをこしらえても，短いのをこしらえたり

してどうにかなりました。綿毛布では１メートルなら１メートルの両方にサシヒモという針刺をしています。その１メートルの所の真ん中の50センチの所にもう１本針があるのですけれども，毛布は織り流しでずっと流れていくのです。織り流しをして50センチのところへ印を入れて，また１メートルのところで印を入れて１枚，ということで毛布ができるので，１枚１枚の毛布にはどうしても長短の差が出ます。それで大津では，織機はあくまでも織子１人１台持ちでした。

他方，ラシャになれば，ビームが終わるまで約40メートルから50メートル，全て織り流しです。整経の際，整経機に50メートルという回転盤がありますが，それが50メートルの時に織物の耳の端に赤の紐などの色糸をくくり，その色糸が出てきたら織子さんが「40メートル，50メートルやな」とみて１反に切りおろすのです。毛布はそういうわけにはいかず，サシヒモで１メートル82位に織った時に筋を入れていかなければなりませんので，長い短いが多かったのです。

## アメリカ合衆国の繊維輸入規制の影響

**阿部**　昭和30年代の初め頃，まず綿織物関係者がかなり厳しい立場に立たされました。アメリカが，日本からの綿織物の輸入がどんどん増えるので，「これ以上売らないでくれ」という圧力をかけてきて，通産省と繊維業界がそれに屈し，昭和30年に対米輸出自主規制に踏み切ったからですが，綿毛布の場合，その影響はどうだったのでしょうか？

**大野**　記憶が薄れていますが，原料がいつの間にか綿からスフに変わってきましたね。スフは，初めは熱をよく取らず冷たくて目方だけが重かった。ところがスフの質が良くなってから，スフ毛布というはっきりした言葉ができました。ただし，いつの間にか化繊毛布で通ってしまうようになりました。綿かスフかというような意識もなくなっていったのです。

**阿部**　そうしますと，アメリカの輸出規制は泉大津では大きな問題にはならなかったのでしょうか？

**大野**　大津ではあまり問題にはなりませんでした。大部分の企業が大きな企業とは違うでしょう。それで，機械が動いていたらいいという観念しか持っていなかったのです。「何でも構へん。織機の音がしとったら食えるんや」ということです。大津の人は単純です。私らでも高等小学校の時，「上の学校行きたい」と言うと，「お前は織物屋の子やから，織機こないして８台動いたったらやな，結構食えるのやから，学校行かんでもええ」と，こんな簡単な言葉が通っていました。

**阿部**　昭和44年から47年頃までの日米繊維戦争の時には綿の時代はもう終わってしまっていたけれども，アメリカは毛・化繊・合繊という全ての繊維製品を日本から買わないという話にまでなりましたが，その影響はいかがでしたか？

**大野**　大津という所では時代の流れをさほど大きく感じません。簡単な家庭工業ばかりで，「仕事があったらええわ」というようなやり方ですから。深喜さんと藤井さんは資力があった関係で，「景気が悪うなったんで，ことしのボーナスを現物支給にさせてくれ」と言っていた時代が昭和25年から30年位でしたか。深喜さんも２回ほど現物支給を実施して，私自体もフラノの服地を２回持って帰ってきたことがあります。その時分の景気が一番悪かったと思います。

**阿部**　朝鮮戦争後の不況ですね。高度成長期におこった，アメリカに繊維製品が売れなくなるという事実は余り意識されなかったのでしょうか？

**大野**　大津ではさほど影響がなかった。大企業では，商社からある程度圧力がかかるようなことがあったかもしれませんが，中間の深喜さん

なり藤井さんなり，賃機を出しているところには，「ちょっと値は下がるけど辛抱してや」という程度の影響があって，規模の小さい織屋をいわば真ん中が抱いて上げてくれていたのだと思います。５台置いているところが，３台なら３台，あるいは１台をとめるかどうかというようなことがあったのですが，それが目に見えたという記憶が私らにはあまりないのです。

**阿部**　昭和46年にはニクソンショックがありまして，それから円高になります。さらに48年には，高度経済成長の終わりと言ってもいいのですが，第１次石油危機が勃発します。これらは今から見ると日本経済の激動期で，特に48年の石油危機ののちには，それまでみられなかった不景気が数年間続きましたが，その頃の経済の変化も泉大津にはあまり関係なかったのでしょうか？

**大野**　つぶれてやしませんな。昭和の初めから，どこもつぶれずに10年ほど前まで来ています。吉野さん，納谷竹さん，松内さん，藤井さん，深喜さん，中島さんは皆２代目です。大津毛織さんは代が変わりましたからわかりません。東亜は私らには関係がありません。興津さんは早くやめ，中島さんもやめました。私たちは，泉大津の織物業は延べ70年の間につぶれたとみています。木製の織機から鉄のそれにかわったのが，私が幼稚園の頃で，私の年齢が70歳をちょっと過ぎた時分に大津の工場では音がしないようになりました。この70年位の間に伸びてきて，おもしろいほどもうけて，いつの間にやら陰へ消えていきました。旧大津では現在，家庭工業として２軒が稼働しています。

納谷竹（納竹と２字で呼ぶこともあった）さんが工場をやめたのを知っている人は少ないのです。納谷竹の工場はこの向こうにありました。それが浜へ移りましたが，息子さんにある日会ったら，「これでしまいだ。簡単に消えていったというたら何やけど，お互いに繊維じゃ食っていかれんな」と言っていました。しかし，「どこそこがやめた」とか「ここがやめた」とかという言葉は泉大津には流れませんでした。

**阿部**　第１次石油危機の頃までは，泉大津ではほかの織物産地ほど深刻な不況はなかったのでしょうか？

**大野**　そうは見えませんでした。

## 泉大津の繊維産業の苦境

**阿部**　問題になりますのは外国からの製品輸入ですね。これは円高と大いに関係しているのですけれども，だんだんふえてきますね。その影響が大津に出始めたのはいつ頃のことでしょうか？

**大野**　私らは外注先を出機というのですけれども，出機が減ってきたのが，自分の所もやめた15年前位でしょうか。平成へ入りかけの頃ですね。

**阿部**　昭和60年のプラザ合意ののち円高が急激に進みましたが，その頃でしょうか？

**大野**　うちがやめる時，織機の買上げがありましたが，それは一番終わりの織機の買上げでした。これは，私は知りませんでしたが，よその人が，「大野さん，あんたとこが最後で織機を売って買上げてもろうて金入った」と教えてくれました。偶然ながら，買上げの終わりで私の所は織機を手放したらしいのです。それからは皆が織機を動かすのをやめていきました。

今，織機１台を潰してもらって古鉄にするのに15万円位かかると言います。古鉄といっても鉄そのものではないのですけれども，それも「15万円でも要らん」と言うのがこの頃の言葉です。私の知っている工場にも８台の織機が据わっています。「工場を空にしたいんやけれども，もう取ってくれない」という。大津という所は家庭企業だからやめるのも簡単ですし，始めるのも早い。板原という，ちょっと裕福な村で織物を習って織機を２台か３台据えて，奥さ

んと自分で織っています。こんな所がおもしろいほど，たくさんありました。それで，泉大津の織物生産量はいつまでたっても96％までしか落ちなかった。それがなぜぽちぽち落ちてきたかというと，シャットルのないレピア織機が賃機に代わってきたためでした。レピアで作られた織物の一番の特徴は耳がないことです。興洋さんが，正月でもレピアを動かしていたのを見ました。誰もいない所で緯糸をつないで，５つも６つも並べています。それが５つも６つもなくなるのに１日位しかかからない。そんな時代が来たのでした。

**阿部**　仕事を続けておられる泉大津の織屋さんは，今でもかなりおられますか？

**大野**　織機は動いています。動いているということは，やはりある程度織っていますね。やめるにやめられないということです。

**阿部**　松内さんはまだやっておられますね。納谷竹さんの廃業については先ほどお話がありましたが，吉野さんは続いていますか？

**大野**　やめました。

**阿部**　まだ大分続いているといえば続いているわけですね。

## 松内工場

**大野**　それが大津の工場です。松内さんの所には工場の感じが今でも一番，残っています。店の入口の部屋に年寄りが座っているか，人が遅れてくるのを待っている。そこが事務所です。それから食事場，製品置き場，工場というのが典型的な泉大津の工場でした。

**阿部**　住宅と工場が一体化しているということですね。

**大野**　本宅があって，裏に工場がある。本宅と工場との切れ間が俗にいう前栽（庭）です。真中に前栽があって，そこで住居と工場とに分かれているという形の所が多いのです。

**阿部**　泉大津の大きな転換の時期は今から15年位前でしょうか？

**大野**　昭和から平成への変わり目頃ですね。今，織機の動いている所は，私の頭で勘定したら４軒です。ほかには織機の音など聞きません。私の町内には１軒ありますが，そこではレピアが３台，あとは一般の織機が入口に１台で計４台です。

**阿部**　そこは個人工場ですか？

**大野**　個人の持ち寄りです。

**阿部**　15年位前には円高ゆえに外国からの輸入が増えたのでしょうか？

**大野**　そんなこととは関係なしに，レピアが出てきたのでそれに駆逐されたということかと思います。私の知っている所でも，織機８台が昔のまま残っていて，わきにレピアが２台動いております。他方，賃織りでレピアを動かしている所が，４，５件ある。あとは力織機を今でも奥さんと主人と２人で織っていますが，いくら動かしても１軒で３台です。

**阿部**　そうなりますと，やや深刻な問題が起こってきます。泉大津の経済は，繊維産業に支えられて繁栄してきたのですけれども，その地場産業がなくなってしまうということですね。

**大野**　こたえているどころではありません。

## 整経機屋

**阿部**　繊維に代わる産業は？

**大野**　ない。初めは私の所の小さい工場でも，管巻き，整経機，織りの３工程が１工場内にありました。うちには織機３台が動いて整経機もありましたが，織機を５台，６台に増やしたくなった時に，親父の友達が「仕事が何かないかいな？」と来たので，親父は「うちの整経機を持っていけ」と言ったので，親父の工場が整経をやめて，その人は整経機を据えて，整経を専門に生活することになりました。

うちの整経機を友達に仕事がないというので貸してあげているのを見て，近所にうちと同様

な所が現れて整経機屋という専門の仕事が１つできました。その次がチーズ巻き，管巻きの独立でした。織屋は，織機ばかりになって，毛布を作ることに専念した。よその工場もそうでしたね。整経機を出す。所によれば管巻きやチーズ巻きも出す。整経機があれば，それだけのチーズをこしらえなければなりませんから，チーズ巻きが必要です。そのようにして泉大津は，糸で食べられるようになりました。整経機（経巻き），管巻，チーズ巻と専業の工場（家庭工業）ができました。今になってみれば，糸に関係のない家庭はないというほど，糸ヘンの中で皆生活してきたのですね。

しかし今度はそれが裏返しになって，全部がこたえているのです。今，「整経機屋ってありますか？」と聞かれたら，私の頭の中にはありません。

**阿部**　整経機屋がお父様のお宅から分かれていったのはいつごろのお話でしょうか？

**大野**　昭和10年頃でしょうか？　その頃，綿毛布が出てきたので，織機を増やさなければならないようになりました。そうしたら工場を拡充できやしません。昔は，私の所も野原の真中に工場を建てていましたが，整経機もチーズ巻きも置いてやりかけて，注文がこなせないようになってきた。私が，昭和２年に幼稚園へ行く前の話ですが，そこに工場を建てたところ，やがて前後左右皆民家になってしまった。そのため，主体であった織機を増設するためには，もっと広い場所が必要になりました。それでまず，古い機械をよそへ委託するようになりました。工場は織機を本体にしてしまい，チーズは巻いてもらい，整経も整経機屋へ頼むようになりました。うちと同様な過程を賃織屋は皆辿っています。整経機屋は，私の知っている限りで４軒でした。

**阿部**　繊維に関連した仕事が，織屋さんから波及してどんどん出てきたのですね。

**大野**　できていったのです。うちが外注に出していたことに関する私の一番早い思い出を話しますと，母方のおじの竹松さんに肩引きの大八車に乗せてもらって，前に綛，後ろに枠を置いて，真中に私がかごの中で座っていた記憶があります。母に，「竹松さんに一遍大八車に乗せてもろうてどこか行ったような記憶があんのやけど，あれお母ちゃんどこ行ってん？」と小学校４，５年頃に聞いたところ，あれは綛を枠に繰ってもらいに，つまり枠繰りに出していたのですね。その時分，チーズ巻きがまだなくて，枠を立てて整経をしていたので，枠が必要だった。

いつの頃からか，紡績が綛で売っていた原糸をチーズで売ってくれるようになりました。それで，外注へ出さずに16番手やニマル双糸を使うようになりました。

チーズに変わってきて，今度はチーズ巻きをやってもらおうと思っていたところ，綛ではなしに経糸のチーズで，繰るようになって，整経機屋にチーズ巻をしないでも持っていけるようになってきました。それで，チーズ巻きで繰っている所と管巻きをやっている所と整経機屋の３つに分かれた。今でも綛繰屋が１軒だけ残っています。松内さんの仕事を主体にやっていますが，そこでは持ってこられたチーズを綛に直して染めなければいけません。染めは綛でしかできませんのでね。愛知県の尾州にはチーズを染める会社がありました。

**阿部**　これまでうかがったお話は，書物には書かれていないことばかりですが，そうした事実が実は後になりますと，一番知りたいところだけれども，誰も知らないことになってしまうので，大変貴重なお話だったと思います。

**大野**　これを読んでもらっても，「間違うてるやんかい」と指摘してくれる人もぽちぽちいないようになりまして，「あんた一番よう知ってる」と言われます。地縁，血縁とよく言いますが，大津という所はよそに縁が少なくて，伯父も叔母も皆大津の人間というようなことですか

ら，狭い泉大津市内だけで知識が固まってしまっています。ただ，各町内には友達や知人が多いので，「今何して食ってんな？」というような対話を交わす機会が多いのです。向こうは向こうで，「もう織りやめてん，整経機屋やめてん」というようなニュースを私に話しかけて，「お互いに年やからやめえや」などと言っています。

ただし，「やめい」という言葉の裏には「継いでくれん」という嘆きもあります。私の所も男の子が１人なのですけれども，織屋なんてめったにしてくれやしません。大阪府大を出てから住友生命を受けさせたらうまいこと通ってくれて，自分ら夫婦だけ厚生年金のおかげでこうして生活させていただいております。「子供は子供で勝手に絵かいてもらおうか」というのが今の大津方式になっています。「後やってます」というのが，２代目の深喜さんに藤井さん位で，吉野から納谷竹から全部なくなっていきましたから。

大津毛織さんでは，臼谷さん，深井さん，城村さんの皆さんが身内です。大津毛織が出発したのは昭和９年のことで，臼谷喜代松さん，深井弥之助さんという身内が寄って始めた会社ですね。

**阿部**　泉大津に限らないのですが，泉北地方に関する記事は，戦前に刊行された紡織関係の年鑑等にたびたび出ているのですけれども，どういうわけかまとまった記録が残っていませんね。

**大野**　そうしたことを語らないのです。泉大津には，商売人でも呉服屋，下駄屋のような職業がありません。食べ物屋だけ２代，３代と生きていますが。なぜそれらがないかというと，「この頃，大野ももうけてきたかして娘の着物こしらえてるで」とか，「嫁入りの道具金かけたで」というような噂が泉大津ではすぐ流れるのです。そうすると，身内が多いですから，「ちょっと気いつけや」と身内からたしなめの言葉がすぐ出ます。それで，私らは小学校に行っている時分には堺の商店街や岸和田の欄干橋（そこには大きな商店街があったのですが，もう経営はしていないと思います）に，物を買うというとわざわざ行ったものなのです。そうすれば，「大野がもうけてる。ちょっとこの頃まずいで」などとということがわからないでしょう。食べ物は，貧乏人，金持ちで，ただ肉を食うか，菜を食うかだけの違いですから，食べ物屋だけは残っています。ですが，下駄屋は２軒あったけれども戦前に潰れてしまい，呉服屋も今残っているのは１軒だけで，あとは皆，やめました。

泉大津は閉鎖的な所なので，織物業の発達史もそれに携わってきた者だけが知っていることで，外部の人は何もわかりません。地の人間は外では地味ですが，内部では派手です。しかし，それは内輪だけのことです。私らでも大津では，戦前も戦後も喫茶店などに入ったことはなかった。そうは言いましても，晩になると皆大阪へ出ていって，よく金を使いました。大阪で使うのでしたら誰も知りませんから，小遣いができたら友達が４，５人寄って，だれかが「大野，行くぞ。きょうは５時や」と言えば泉大津の駅に５時に集まって，それからミナミでよく遊びました。ただし，身内が多いので，「歳雄，おまえこのごろよう金使うてんのやって」というような忠告が伯父や叔母から入ってくるのです。それで，泉大津の話は外へは流れないで，うちで始まり終わっていました。

同時に，家庭工業ですから松内さんにせよ私の所にせよ，発祥の地点からそれ以上工場を広げませんでした。よほどの資力がなければ外へ出ていかれなかったのです。その中で，深喜さんはトップを切って，国道26号線が引かれてからまもなく昭和11年に工場を移転して，十数台の織機を30台にして，昭和25年の拡大の波に乗った時には60台に増やしました。それが今の深喜の繁栄の原点です。松内さんにしても，金

や地面はいくらでもありましたが，向こうは温厚な家庭で，「何も博打を打つようなことせんでも，仕事をただできたらええ。今の形態で十二分に食っていける」ということでしたから，本当は松内さんあたりが外へ出ないといけなかったのですが，松内さん両家では，昔も今も同じという形のまま残ったのです。

## 泉大津市と和泉市の織物業

**阿部**　一口で泉州といいましても，場所によって随分色々な違いがございますね。私は昔，泉南のことを調べておりましたけれども，今思いますと，泉南でも貝塚や泉佐野の辺り，あるいは熊取辺りのことを調べていました。私の見当では，戦前の泉南では岸和田辺りにもう１つ，内地向けの小幅白木綿を主な製品とする織物業の中心地があって，それが現在の和泉市辺りとつながった１つの経済圏だったのではないかという印象があります。貝塚から熊取や泉佐野にかけては，帯谷さんとか南さんなど非常に大きな織屋がかなりありまして，輸出向けで随分伸びていった所です。それから，泉佐野から泉南の南の方面までは，割合規模の小さい織屋がたくさんあって，特に佐野の辺りではタオルが盛んに作られていました。一口で泉南と言っても３つの違った地域から成っていることが，今になるとわかります。泉北内部でもJR阪和線を境に泉大津という，和泉市とはまた別の世界があったことがお話からわかってきました。

**大野**　和泉市の織機は小型ばかりでしょう。私らにも不思議なほど，阪和線を越えるとカチャカチャという音が聞こえますが，泉大津ではそうした家は１軒もありません。和泉市では大きい所で森田さんなどもありましたが，織機１台持ちの織屋は，戦後は全部向こうから泉大津へ来て織布を覚え，帰ってから畑を売ったりして農業から織物業に変わった工場ばかりで，織機５台が据わっている工場はないはずです。大津のように20台，30台と据わっている織物製造工場はありません。私らの所でも２軒を育てました。向こうから勉強に来たり聞きに来たりしました。私は深喜出身ですから，各工場を回ってよく指導に歩いた記憶もあります。大津は織機１台持ちですから，織子に技能が要ります。１枚１枚織らなければなりません。寄宿舎も必要なく，織子は通勤できました。小型織機の場合は，１人で10台，20台を夜も昼も動かしていました。

今でもそうなのです。戦争中，私が軍隊で信太山にいた時，槙尾山の所まで小機の音が聞こえました。和泉市と泉大津の織物業がなぜ，おもしろいほど分かれたのかという理由は誰も知りません。話は飛びますが，綿毛布は和歌山県の高野口（こうやぐち）でも作っていましたけれども，そこで機械の部品が折れたりすると，高野口から泉大津にその溶接をしてもらいに人が来たのです。高野口では２，３軒の織屋が泉大津に知合いができていましたが，高野口では機械が折れたりすると溶接屋がないので，修繕や肉盛りのために大津まで皆来たのです。私らは高野口といえば，よほど遠いように思っていました。「山越えたら一またぎや」とその人たちは簡単に言っていましたけれども。大津でそれに応じていたのは，織機の部品の故障の修繕・溶接をする工場と，減ったところを肉盛りしたり，折れた所をつないだりする上田と川端という２軒の鍛冶屋でした。

そのほか機料品店というのがありまして，小柴と小山という業者が今でもやっています。これらも２代目ですが，泉大津の織屋は大体その２軒から織機を買っていました。２軒は織機を売って，織屋の世話をし，部品を売っていました。私は深喜との関係から，織機を直接買っていた家がないのです。深喜さんが織機を平岩や大隈から買っていましたので，私はそれに便乗していました。小山さんや小柴さんも平岩と大隈の中間代理店をしていました。代理店の看板

は今でもかかっています。

よそにもあると思うのですけれども，「朝は朝星，夜は夜星」という言葉を年寄りがよく言います。朝はまだ星の出ている時分から機を織って，夜は星が出てから帰った，という意味ですね。私の所でもよく言いましたが，その通りでして，労働基準局ができるまでは織子さんが工場に勝手に入ってきて，機械を勝手に動かしていました。

**阿部**　どうもありがとうございました。

＊以下は聞き取りの際，大野氏から提出された２編のエッセイである。

**（補論１）大野歳雄「２つの疑問」**

繊維業界に身をおきながら，長らく２つの疑問を持っていました。

1　泉大津の織物工場の従業員は，なぜ寄宿舎住まいではなく通勤工だったのか？

2　泉大津市内ではなぜ広幅の織機（92インチ，87インチ）で製品を作っていたのか？

**1　通勤と寄宿舎の問題**

現在の泉大津市内には大正期に，紡績工場独特の赤煉瓦の北泉紡績所が建てられました。高い塀に囲まれた工場で，一般に関係者以外は中を見ることができませんでした。役付き社員は，近くにその当時では高級な10軒ほどの住宅に住んでいました。通勤する一般の従業員（主に男性）のためには会社近くに，４筋並列する８軒長屋（棟が１つ）の30軒ほどの社宅がありました。この人たちは工場が建ったとき，他地域から転入してきました。

紡績の作業は，２部制で昼夜稼働していた関係で，通勤者ではなく寄宿舎で暮らす女工さんが担当していました。欠員が出ても泉大津で補充したことは１件もなく，遠方から雇用されてきました。内部のことで外部に聞こえることは何もありませんでした。

女工さんは，会社の南側の２階建ての寄宿舎に居住し，外出も自由ではなく監視付きでした。休みには映画や芝居を見に出ていましたが。多くは五島列島（天草）方面から雇用されてきた人たちで，監視も他の紡績から引抜きを防ぐためでもあったと考えられます。

女性作家，林芙美子も国から出て来て，転々としながら貝塚の紡績の女工をしていたことがあるという話を貝塚で聞きました。繊維業界の発展の過程であった大正から昭和初期は，搾取時代で女工の生活には苦労が多く，食べ物も貧しかったのか，現在では禁句ですが，外部の人たちは女工を「ぶた」と呼びました。食べる物は大津で仕入れた関係で，業者の言葉で，下級の食品が納入されていた。「ぶた」が食べるような物を食べさせているということを意味する業者の言葉から出たと思います。泉南地方でも，この言葉は同じように使われていました。

寄宿舎は大津では以上の１カ所だけでしたが，忠岡，春木，岸和田，貝塚，泉佐野に多く建っていました。私は40年間，民生委員を務めましたが，生活保護家庭のランクでは大津は大阪市内同様の１級でした。泉南は２～３級で，物価が安かった。当時は農村が多く建築用地も容易に入手できたので，泉州南部には紡績工場が多かったのでしょう。そこでは紡績以外の個人工場も，木綿，タオルを織る関係上２部制でしたので，寄宿舎を持ちました。

**2　織機の幅**

一口に織物と言っても，小幅の木綿機，広幅の毛織物機の違いが２部制作業の有無になりました。泉大津の毛織機は92インチ，87インチと幅が広い。回転数は分当り90回が最高で，織工１人は織機１台を担当していました。各製品それぞれに技術が必要でしたが，織工には同一の織機をあてがい各人の技術を活かしました。他

方，小機は回転数が１分200回以上で，織工１人が20台ぐらい担当していました。小機は運転できれば緯糸（よこいと）の交換以外に技術を必要としません。織機の機能が精密になった現在では，織工が受け持つ織機も多くなり，織機のなかに織工を探すのに苦労します。小機の場合，１年中同じ物を製織するので交替勤務で稼働ができたのです。

JR 阪和線府中駅の山手にあたる現在の和泉市では小幅木綿織機が用いられ，製品は小幅の木綿でした。こうした製品の分化に関してはとくに規制はありませんでしたが，製品は阪和線を境にして明確に分れていました。戦後の和泉市では泉大津で見習いをし，技術を覚えて毛布織機を据える業者もありましたが，戦前はそうした業者は１軒もなく阪和線を境に泉大津の広幅物（毛布）と現，和泉市の小幅物（木綿）とに製品が不思議なまでに分化していました。泉大津市内と和泉市間の広幅織物および小幅木綿の製織の分離がなぜ生じたのかは不明です。

### （補論２）大野歳雄「泉大津市の繊維の盛衰を考える」

深喜毛織株式会社の『100年史』によると，創業は明治20（1887）年と記録されている。深井喜一氏（現社長）が三代目である。喜一氏から見ると，伊三郎氏は曾祖父であり，喜逸氏は父になる。二代目の祖父（婿養子）は家業を継がなかった。平成16（2004）年では117年間の伝統があり，今日この不況のなかで７月に配当を出している。

ここでなぜ，深喜毛織の記録に言及したのか。私は同社社員 OB の代表であり，先代の大野政吉が織物業を営む関係上，綿毛布を織る傍ら，深喜毛織工場（昭和25年に株式会社）のカシミヤ・ショールの下織りをしていたので，小学校４年生ごろから，使い走りで何かと織物関係の用事で出入りしていた。昭和12年，同社に一時入社し，戦後も昭和25年におけるその株式会社への改組拡充のため社長の話相手となった。当時の社長の喜逸氏は，軍歴としては信太山野砲連隊の大隊副官を務め，部隊編成に堪能だった。私も砲兵科功績室で部隊編成を担当し，軍の組織編成に詳しかった。社長は株式会社組織を部隊組織と考えて，織・紡績・製絨のそれぞれに関する社員組織について相談を受けた。それから16年間，同社に勤務し，その後も家業を管理し，服地の下織りをしながら，深喜毛織から給料を受け取り，社員並みに同社に出入りしていた。泉大津市の繊維業界を語るとき，深喜毛織の歴史に即して考えれば，年代やその時々の状況がよく分かる。なお市内の繊維企業で『100年史』を発刊したのは深喜毛織だけである。

泉大津の織物業は家庭工場として発展していった。大企業はなく家庭工場として70余年間，全国シェア96パーセントの綿毛布生産を維持してきた。労働組合のある会社は，大津毛織合資会社，藤井毛織株式会社，深喜毛織株式会社の３社である。なお，藤井毛織と深喜毛織の株式会社化は戦後のことである。株式会社が多数できたものの，労働組合を組織するほどの従業員はいない家庭工業形態であった。この家庭工業形態のため泉大津織物業界は約70年間でなくなった。

70余年の年数は私の年齢から算出した。７歳（昭和２年）で木製の手織機が鉄製・電動織機に変わった。80歳（平成13年）頃には電動織機が稼働している工場は５軒以外記憶にない。それらはシャットルが走らないレピヤ製品を作っており，電気で自動化されているため，生産量はあまり減少していない。

製品は毛布と同様にみえるが，私は毛布とは見ていない。レピヤ製品には縁（みみ）がなく，いかに技術が進歩しても縁は作れないために製品は四方縁（ほうべり）である。他方，織機で織り上がった製品は天地縁（てんちべり）である。

泉大津の最盛期には，町を歩くとＡ工場の機

音が小さくなるうちに隣のＢ工場の機音が聞こえてきて，機音が消えることなく続いた。昨今の繊維業の衰退は，同業界で今日まできた私には淋しく感じられる。

家庭営業として明治・大正・昭和初期より織物を営んでいた工場の内部では，石油ランプが電球，さらに蛍光灯に変わり，織機が木製より鉄製に変わったがそのほか，管巻きと経巻きが手巻きから電力に変わった。深喜，松内，納谷，藤井，大津毛織，前山と，そうした例は多数ある。

私のところは，家庭工業から脱皮できなかった。操業を始めた工場が最盛期でも拡大できなかった。大正９年頃，父が新設した工場は，野原の真中にあり，回りには人家がなく，キツネが残飯を食べに来た。小学校４年生の頃，織機を増設するため住居を壊して工場にし，家族はその隣の借家住まいになった。織物業の発展とともに大津町の人口は増加し，それに伴ない人家も増え，工場の回りには人家が密集し，尺余の空地もなかった。

織物業を営むために，泉大津には独特の工場建設がみられる。本宅（住居）の裏に工場がある。玄関を入ると左に部屋があり（泉大津では店の間と呼ぶ），右に事務所がある。その中央を工場の奥まで通り抜ける通路がある。従業員が出勤する時，玄関から入る店の間に主人または同家の長老が新聞を読んでいるか，キセルで煙草を吸っている。店の間には大きな時計がかかっている。そこが従業員にとっては関所であり，工場からの製品の出し入れにも目が届く場所であった。

深喜毛織，松内直，前山，納谷さんと今もそうした工場の形態が残っている。私のところもそうである。経営者の家族の顔を見ずには工場へ入れなかった。始業前に深喜さんに用事にいくと，おじいさんの伊三郎氏が捨て糸をさばいていた。「帰ると学校か？　しっかり勉強しいや」と，ときには飴玉を包んでくれた。子供の私には福の神である。機音が始まると店の間には誰もおらなくなる。明治・大正初期から平成に入り廃業しても工場の構造は残っている。深喜毛織は，国道26号線が敷設された２年後の昭和11年，その沿線に工場を移転した。２代目社長に先見の明があった。その時，織機を10数台から30台に増設した。さらに昭和25年，株式会社化と同時に４棟を増築して60台にした。現在は板原の製絨工場に織・紡績を統合し，旧工場は残っていない。

戦前からノコギリ屋根の４棟で明るい近代的な工場であった。織工に配慮し，脱衣室，私物箱，食堂，大きな鏡のついた洗面所などがあった。戦前当時，織機の横で作業衣に着替え，緯糸をおく箱の下に衣類を保管した。弁当も自分の織機の前で食べた。それはどこの工場でも同じであり，私も織物工場ではあたりまえのことと考えていた。始業と終業の合図も，もともとは豆腐屋の鳴らすリンであったが，深喜ではそれがサイレンに代わった。

見るもの，聞くものが近代的となり，驚いた。工場内も部署が明確に別れ，糸から織り上がる反も流れ作業になった。その後，新築された他工場でも，深喜ほど整備された工場を見たことがない。織機30台を増設して60台にした時，社長は30人の織工を募集できるか否かを心配していたが，私は心配しなかった。工場の設備は大津一，織給料も社長は知らなかったが大津一であった。深喜毛織で働くことは，織工のあこがれであり，募集すればいつでも集められる自信があった。小学校を出て，織工場に就職すると，管巻き・チーズ巻から始まる。目的は織工になることである。管理者はいつも時間があれば，その子たちを織工のそばで見習いをさせて予備の織工の養成を心掛けた。織機30台を増設したときも，設置するとすぐに稼働して一時も止まることがなかった。深喜毛織は，寺院に囲まれた旧工場から，交通の便のよい26号線に移転した。この先見の明が今日の深喜毛織の

繁栄の基礎となっている。深喜毛織では工場の拡張が思うようにできたので，整経（ビーム巻），チーズ巻，管巻，布掃除と，外注に依存することなく，工場内で一貫作業で織物を仕上げることができた。

織物業も昭和に入り繁栄して，家庭工場では注文を受け切れなくなり，工場を拡張できないので，製織以外の作業を外注に依頼するようになった。その結果，副業である整経，チーズ巻，管巻，布掃除を生業として生活する家庭が増えた。泉大津では糸関係で生活していない家庭はないというほどまで織物業は活気づいていた。

では，それまで外注の力を一切借りなかったかというとそうでない。私の一番古い記憶によれば，母方の叔父が，大八車に綛（かせ）と枠を積んでその真中に籠を置き，その籠に私が入れられてどこかへ連れていってもらった。小学生になってから母にその記憶を質したところ，いずれも現在は泉大津市の虫取村と穴師村に枠繰りを手伝ってもらった時だと教えられた。

私は物心付いた時から電気の中で暮らしており，石油ランプの生活を知らない。工場に入った16歳のときに，先輩から，以前に夜業（よなべ）が終わると，板原，虫取村へ織工を提灯で送った話を聞いた。夜業は石油ランプで作業していたことになる。それで作業が出来るのかな，と長らく疑問に思っていた。それから５年後，中支戦線で２年間，石油ランプの生活をした。銃の分解，組み立て，教典の勉強，手紙を書くことなどに何一つ不便を感じなかった。

電気で思い出すことは，初めて電線が引かれて明かりがついた時に関する伝聞である。母方の叔父が，キセルにキザミを入れながら，あの電線で火が付くのだろうかと言っていた。「つく」「つかない」と５，６人いた人たちからは結論が出されなかったと母が話してくれた。母が５歳の頃のことだという。

私が小学生の頃は夕方５時に点灯した。神杜の森で遊んでいると電気がつく。それを合図に，遊んでいた子たちが皆，家に帰った。そのころ電球は電力会社から借りており，１軒の家に１個か２個に制限されていた。電球が切れると「南海散宿所」へ印鑑を持って交換にいった。50燭（しょく）位であったと記憶している。無断で二股・継ぎ線で電球を余分に点灯すると，電気会社の監視員に見つかり，器具を没収のうえ電線が切られた。

私が自慢していたのは，我が家では昼間でも電気が付いていることであった。同級生の友人が「大野の家は昼でも電気がついている」と不思議そうに言っていた。メータ計がついていたので使用量払いだった。

綿毛布生産量全国シェア96パーセントの泉大津織物業界の発展には以下のような陰の支援による功績が大きかった。

⑴　無地を織ると織り流しでよい。額（毛布の天地の模様）を入れると紋紙を替える。ジャカードには紋紙の入れ替えのために織機の上（２階と呼ぶ）に上がる作業がある。その紋紙の入れ替えを，下から替えるジャカートが永山氏によって開発された。額が１枚の毛布に二つある。掛け替えに４回，２階に上がり下りする。織工の労力が助かり，織り上げ枚数が増した。

⑵　テンプル（織り幅の調整）緯糸の引きかたで毛布の縁（みみ）の張り方が変わる。張り竹という道具がある。毛布の幅より少し広い。３～４cm 織るごとに，織り幅を統一するために差し替える手間がなくなった。

⑶　経糸のビームの張りの調整をするために10cm ほど織ると，手作業で経糸の張りを緩める。ビームの調整をブレーキバンドで調整できるようになった。

⑷　緯糸は木管（くだ）に巻く。木管が長いと緯糸が長く巻かれて，織り上げの成果が上がった。ただし，ぬき糸が杼（ひ）から出るとき，木管によるマサツのために縁が引き込まれる難点がで

た。織物は，縁が製品の良質の善し悪しをきめた。昭和40年ぐらいに無芯になる。木管のぬき糸より５本ほど，長く織れたので織り上げが増した。

(5) 織機の改良。織機には２種類ある。平岩と大隈は名古屋で生産された。ラシャ・服地専門の織機で織り上げた製品に，たて糸の張りがよく，ぬき糸の密度の打ち込みがよい。毛布は起毛するために，経糸の張り，緯糸の打ち込みにはあまりこだわらなかった。密度を加えるために織機自体に重量が必要で，オーバー地，服地の製品に向いていた。

毛布製織専門の織機が開発された。大津の浜織機・大由織機，岸和田の梶広織機であり，見た目も軽便であった。値段も服地織機の３分の１位だったと記憶している。平岩織機は，昭和43年で66万円との記帳がある。浜，大由，梶広の各織機は，軽便で回転も速く，能率が上がった。多くの人たちの努力の成果である。

（大阪大学大学院経済学研究科教授）

## History of Weaving Industry in Izumi–otsu of Osaka Prefecture Talked by Mr.Toshio Ohno (2)

Takeshi Abe

This essay is a record of the talk of Mr. T. Ohno about the history of weaving industry in Izumi–otsu district, a part of the Senboku weaving area, of Osaka Prefecture. Mr.Ohno was born in 1921, and had worked at manufacturing cotton and woolen fabrics at the factory established by his father and at Fukaki Keori Company for a long time, except for the wartime. His talk is very valuable for the research about the history of weaving industry of Senboku. This essay is related mainly to the postwar period.